

(22-1) Sundarīparibbājikāvattu 女遍歴行者スンドリーの物語 — ブッダを陥れようとした外道たち 306

abhūtavādīti imaṃ dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto sundarīm paribbājikāṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、女遍歴行者スンドリーについて語られたものである。

この物語は、「さてそのとき、世尊は尊敬されていた。重んじられ、崇められ供養されていた」と、『ウダーナ 4-8. Sundarīsuttam』の中に詳しく述べられている。Maṇisūkara-jātaka(285)。ここではその要約を示す。

世尊と比丘サンガに五大河の大奔流にも等しい捧げ物の利得と尊敬があったとき、供物の利得と尊敬を失った外道たちは、太陽が昇ったときの螢のように輝かなくなり、一つに集まって相談した。

「我々は修行者ゴータマが現れてからというもの、捧げ物の利得と尊敬を失ってしまった。誰一人として我々が存在していることさえ知らないありさまだ。誰かと組んで修行者ゴータマに恥をかかせて、彼の利得と尊敬の邪魔をしてやろう。」そこで、彼らは考えた。「スンドリーと組めば事がなせるだろう」と。

「妹よ、あなたは実に見目麗しく、とても美人だ。修行者ゴータマの不名誉になることを作り上げて、大勢の人々にあなたの言葉を信じさせ、彼が利得と尊敬を失うようにしてもらいたい。」スンドリーは承知して、「修行者ゴータマさまと一緒に一つの香房で過ごして、あの方を煩惱の楽しみで楽しませてから戻ってきたのです」と皆に答えた。外道たちは数日経つと悪党たちにカハーパナ金貨を与えて、スンドリーを殺して、修行者ゴータマの近くの花輪のゴミ溜めの中に捨てさせた。サーヴァッティ市の住人たちのうち、聖なる弟子たち以外の他の人々は「サーキヤ族の息子にしたがう修行者たちの仕業をご覧下さい」などと言って、市内でも市外でも近くの林や森でも、比丘たちを誹謗して歩いた。

比丘たちはその出来事を如来に知らせた。師は、「それでは、あなたがたもあの人々を同じように非難しなさい」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。「306 ありもしないことを語る者は地獄に赴く、あるいはしたことを「私はしていない」と言う者も。彼らはどちらも死んだのち同じになる、来世でも行い悪しき人々である。」と。

法話が終わったとき、多くの比丘たちが預流果などに到達した。

王は、「スンドリーが他の者たちに殺されたことを調べよ」と、家臣たちを派遣した。例の悪党たちはもらった金貨で酒を飲みながら互いに喧嘩をしていた。一人がもう一人に言った。「おまえはスンドリーを一撃で殺して花輪のゴミ溜めに捨て、もらった金貨で酒を飲む、いいさ、いいさ」と。王の家臣たちはこの悪党たちを捕らえて王に見せた。すると、王は彼らに、「お前たちが殺したのか」と問いただした。「その通りでございます、陛下。」王は外道たちを召し出して、「行きなさい。おまえたちはこう言いながら市内を廻りなさい。『あのスンドリーは、修行者ゴータマに汚名を着せようと思った我々が殺させたのです。修行者ゴータマにもゴータマの弟子たちにも、罪はありません。我々の罪です』と。」外道たちは王の命令通りにした。愚かな大衆はそれを聞いて信じた。外道たちも人殺しの刑罰を受けた。それ以来、ブッダたちへの尊敬は大きいものになった。

306. Abhūtavādī nirayaṃ upeti, yo vāpi [yo cāpi (sī. pī. ka.)] katvā na karomi cāha [na karomīti cāha (syā.)]; Ubhopi te pecca samā bhavanti, nihīnakammā manujā parattha.

306. 事実ならざることを説く者は、地獄へと近づき行く。あるいは、また、彼が、為しておきながら、なおかつ、「[わたしは] 為さない」[と] 言うなら、[彼もまた、地獄へと近づき行く]。両者ともどもに、彼らは、下劣な行為(劣業)の人間たちとして、死してのち、他所(来世)において、等しき者たちと成る。

306. Abhūtavādī nirayaṃ upeti Yo vāpi katvā na karomicāha Ubhopi te pecca samā bhavanti Nihīna kammā manujā paratthā

306 偽り語るその人と 為して為さずと言う人は 共に地獄に墮ちゆきて 来世劣業れつごうの者となる

訳：江原通子 No.182 (2010年4月) 名声の落とし穴 ブッダは非難を名声に変える Those who live in glass houses shouldn't throw stones

アブータワーディー ニラヤン ウペーティ ヨー ワーピ カトウワー ナ カローミ チャーハ
Abhūtavādī nirayaṃ upeti, yo vāpi katvā na karomi cāha;
事実ならざることを説く者は、地獄へと近づき行く。 彼が、あるいはまた、為しておきながら、為さないと言うなら、
Abhūtavādī=Abhūta/abhūta(a.n 依属)[a-bhūta]不実の、不真の;虚偽-vādin(a.m)虚言する、不実語者+vādī/vādin(a.m.sg.nom)[vāda-in]
説者、主張者、論師 nirayaṃ/niraya(m.sg.acc)地獄、泥犁 upeti/upeti(v.pr.3sg)[upa-i]ゆく、近づく、獲得する、到る、yo/ya(関代 m.sg.nom)
[Sk.yah]~である人、~であるもの vāpi=vā/vā(adv.conj)または、或は+pi/pi[=api](adv.conj)も、亦、いえども、けれども、たとい...でも
katvā/karoti(v.ger)[kr]なす、行う、作る na/ karomi/karoti(v.pr.1sg)[kr]なす、行う、作る cāha=ca/ca(conj)~と、また、しかし、~も、そして
+āha/āha(v完了.3sg)[//]言う、言った;

ウボーピ テー ペッチャ サマーバワンティ ニヒーナカンマー マヌジャー パラッタ
Ubhopi te pecca samā bhavanti, nihīnakammā manujā parattha.
両者ともどもに、彼らは、 死してのち、等しき者たちと成る。 下劣な行為(劣業)の人間たちとして、 他所において、
Ubhopi=ubho/ubho(a 双数)[Sk.ubhau]二つ、双、両者 pi/ te/ta(人指示代 m.pl.nom)彼、その、彼女 pecca/peccā;pecca(adv)[pa-i;ger.cf.BSk.pretya]過ぎ去りて、死後に samā/sama : ①(m)[<sam]寂、静、平静②(m)[śram]疲労③(m.pl.nom)[//]同じ、同一の、平等の、正しき、まさしき bhavanti/bhavati(v.pr.3pl)[bhū] ある、存在する、nihīnakammā=nihīna/hīna(a 有持)[jahati hā の pp]捨てられた、劣った、下劣の、卑しい、卑俗の、欠けたる-kamma 卑業+kammā/kamma(n→m.pl.nom)[Sk.karman]業、行為、作業、家業、羯磨、儀式 manujā/manuja(m)[manu-ja]人、摩奴所生者 parattha/parattha : ①(adv)[Sk.paratra]他処に、来世に②(m)[para-attha]他利。

(22-2) Duccaritaphalāpīṭavattu 悪行の結果を味わう者たちの物語 307

kāsāvakaṇṭhāti imaṃ dhammadesanaṃ sathā veluvane viharanto duccaritaphalānubhāvena pīṭe satte ārabha kathesi.

この法話は、師が〔ラージャガハ市の近くの〕竹林精舎に滞在しておられたときに、悪行の結果を舐めることで苦しむ者たちについて語られたものである。

マハー・モッガッラーナ尊者がラッカナ長老と一緒に〈鷲の峰〉から下りようとしたとき、骸骨餓鬼などのさまざまな姿を見て微笑を浮かべ、ラッカナ長老に微笑の訳を訊ねられると、「ご同朋よ、その質問には適当な時間ではありません。如来のもとで私にお訊ね下さい」と答え、如来のもとで長老に訊ねられると、骸骨餓鬼などを見たことを話して、「ご同朋よ、ここで私は〈鷲の峰〉から下ろうとするとき、比丘が空中を飛んでいるのを見ました。彼の体も燃えていました」などという具合に、鉢と衣と帯などもろとも炎に包まれている五人の同じ法の仲間（仏教比丘）について語った。vin.III.104-108、南伝I.p175。

師は、カッサパ仏の教団で出家したが、出家者に相応しいことができなかつた者たちの罪惡を語られ、その場でそこにすわっていた多くの者たちに悪行の結果を明らかにしつつ、次の詩句を唱えられた。「307 袈裟を首に巻いた多くの者たちが、行い悪しく自制心を欠く罪深い行為のゆえに、悪人たちは、地獄に赴く。」と。法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。

307. Kāsāvakaṇṭhā bahavo, pāpadhammā asaṇṇatā; Pāpā pāpehi kammehi, nirayaṃ te upapajjare.

307.黄褐色〔の衣〕(袈裟)を首にしながら、自制なく悪しき法(性質)の者たちが多くいる。悪しき者たちは、彼らは、〔自己の爲した〕諸々の悪しき行為(悪業)によって、地獄に再生する。

307.Kāsāvakaṇṭhā bahavo, Pāpadhammā asaṇṇatā; Pāpā pāpehi kammehi, Nirayaṃ te upapajjare.

307.袈裟をば首にまといつつ 性さが罪深く自制なき 悪人達は悪業で 地獄に再生するならん 訳：江原通子

307.袈裟を頭から纏っていても、性質(たち)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによって、悪いところ(地獄)に生まれる。中村元訳

No.184 (2010年6月) 聖職者も安全ではない まことの聖職者はころを清らかにする Spiritualism is a world of chaos.

カーサーワカンター

バハウォー

パーパダンマー

アサンニャター

Kāsāvakaṇṭhā

bahavo,

pāpadhammā

asaṇṇatā;

黄褐色[の衣](袈裟)を首にしながら、多くいる。

悪しき法(性質)の者たちが

自制なく

Kāsāvakaṇṭhā=Kāsāva/kāsāva : kāsāya(a有具)[<kasāya,kasāva.BSk.kāṣāya]渋色の,袈裟,黄衣-vattha 袈裟衣+kaṇṭhā/kaṇṭha(m)

[//]咽喉,のど,首 bahavo/bahu(a.m.pl.nom)[//]多くの,多の pāpadhammā=pāpa/dhammā/ asaṇṇatā/asaṇṇata(a)[a-saṇṇata<sam-yamのpp]無制御の,無抑制の;

パーパー

パーペーヒ

カンメーヒ

ニラヤン

テー

ウパパッジャレー

Pāpā

pāpehi

kammehi,

nirayaṃ

te

upapajjare.

悪しき者たちは、

諸々の悪しき 行為(悪業)によって、

地獄に

彼らは、

再生する。

Pāpā/pāpa(a.n→m.pl.nom)悪し,悪,悪人 pāpehi/ pāpa(a.n.pl.abl)悪し,悪,悪人 kammehi/kamma(n.pl.abl)[Sk.karman]業,行為,作業,家業,羯磨,儀式, nirayaṃ/niraya(m.pl,acc)地獄,泥犁 te/ ta(人指示代 m.pl.nom)彼,その,彼女 upapajjare/upapajjati(v.fut.3pl 反照態)[upa-pad]再生する,往生する。

(22-3) Vaggumudāṭīriyabhikkhuvattu ワグムダー河岸の比丘たちの物語 308

seyyo ayoguḷoti imaṃ dhammadesanaṃ sathā vesālīṃ upanissāya mahāvane viharanto vaggumudāṭīriye bhikkhū ārabha kathesi. vatthu uttarimanussadhmapārājike (pārā. 193 ādayo) āgatameva.

この法話は、師がヴェーサーリー市の近くのマハーヴァナ(大林)精舎に滞在しておられたときに、ワグムダー河岸の比丘たちについて語られたものである。話は〔『律蔵』の〕超人的な物事〔を語ることを禁止する〕パーラージカ罪(サンガ追放となる重い罪)の中に出ている。vin.III.87-91、南伝I.p144。

そのとき、師はその比丘たちに、「比丘たちよ、あなた方は腹を満たすために、在家者たちの前で、お互いに超人的な力をそなえていると称賛しあつたのですか」とお訊ねになり、彼らが、「その通りでございます」と答えると、彼らをさまざまな仕方でお叱りになって、次の詩句を唱えられた。「308 炎の如く熱せられた、鉄の玉を食べるほうがよい、戒めを守らず自制なくして、国の施食を食べるより。」と。法話が終わったとき、多くの人びとが預流果などを獲得した。

308. Seyyo ayoguḷo bhutto, tatto aggisikhūpamo; Yañce bhujjeyya dussīlo, ratthapiṇḍamasāṇṇato.

308 すなわち、もし、自制なく戒に劣る者が、国人による〔行乞の〕食を受けるなら、熱せられた、火炎の如き鉄の玉を食べたほうが、より勝っている(悪業を作つて地獄に落ちるよりははまだましである)。

308.Seyyo ayogulo bhutto, Tatto aggisikhūpamo; Yañce bhujjeyya dussīlo, Ratthapindamasāṇṇato.

308.戒を守らず 自制せず 天下の施食せじき受けんより 赤き炎に焼かれたる 熱鉄丸を喰はむがよし 訳：江原通子

No.185 (2010年7月) 仕事とはどんなもの?盗取受用の話 Livelihood, a necessary evil.

セツヨー

アヨーグロー

ブットー

タットー

アググスイクーパーモー

Seyyo

ayoguḷo

bhutto,

tatto

aggisikhūpamo;

より勝っている。

鉄の玉を

食べたほうが、

熱せられた、

火炎の如き

Seyyo/seyya(a.n.sg.nom)よりよき,よりすぐれた ayogulo=ayo/aya,ayo(n 依属)[Sk.ayah]鉄-guḷa 鉄丸+guḷo/guḷa(m.sg.nom)

[Sk. guda]: ①玉,球②砂糖,糖③房群,鎖④糸玉 bhutto/bhutta(a.m.sg.nom)←bhujjati: ①(v.pp)[//bhuj ②]食べる,享受す,受用する ②(v)[bhuj ②]浄める,浄化する, tatto/tatta(a)[Sk,tapta,tapati のpp] 熱せられた,赤熱の←tappati: ① [Sk.tapyate.tapati tap:pass]焼ける,苦しむ,惱む。 ② [Sk.trpyate tṛp]満足する,喜ぶ; aggisikhūpamo=aggi/aggi(m 持)火,火神,火天 sikhā/sikhā(f 有属)[Sk.sikhā]頂,頂点,尖端(鳥の)頂毛,光焰+upamo/upamā(f→m.sg.nom)比喻,譬え=opamma(n);

ヤンチェー

ブンジェツヤ

ドウツシーロー

ラッタピンダマサンニャター

Yañce

bhujjeyya

dussīlo,

ratthapiṇḍamasāṇṇato.

すなわち、もし、

受けるなら、

戒に劣る者が、

国人による〔行乞の〕食を

自制なく

Yañce=yañ/ya(関代 n.sg.nom)[Sk.yah]〜である人,〜であるもの+ce/ bhujjeyya/bhujjeyya(a.3sg)←bhujjati: ①(v.opt)[//bhuj ②]食べる,享受す,受用する ②(v)[bhuj ②]浄める,浄化する dussīlo/dussīla(n→m.sg.nom)[du-sīla]悪戒,破戒,劣戒,

ratthapiṇḍamasāṇṇato=rattha/rattha(n 依属)[Sk.rāṣṭra]国,王国-pāla 護国者,国王-piṇḍa 国での行乞の食+piṇḍam/piṇḍa(m.sg.acc)[//] 丸いもの,球; 団食,食物; 集団+asaṇṇato/asaṇṇata(a.m.sg.nom)[a-saṇṇata<sam-yamのpp]無制御の,無抑制の。

cattāri thānānī imam dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto anāthapiṇḍikassa bhāgineyyaṃ khemakaṃ nāma setṭhiputtaṃ ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、アナータビンディカの甥のケーマという長者の息子について語られたものである。ケーマは大変な美男子だった、ということである。だから、ほとんどの女性たちは彼を見ると心奪われ、理性を保つことができなかった。彼も他人の妻と密通することを楽しんでた。するとある晩、王の家来たちが彼を捕らえて王に会わせた。王は「[アナータビンディカ] 大長者に合わせる顔がない」と、何も言わずに彼を解放させた。ケーマはいっこうにやめようとしなかった。そこで、二度目、三度目と王の家来たちは彼を捕らえて王に見せたが、その度に王は解放させた。

大長者はこの出来事を聞いてケーマを連れて師のもとへ行き、その出来事を話して、「尊師よ、この男に法を説いてください」と言った。師は彼に焦燥の念を起こさせる話を語られ、他人の妻との密通の欠点を説き明かされて、次の詩句を唱えられた。「309 他人の妻と密通する人は、四つのことに用心がない、[第一に] 悪業を得る、[第二に] 快い眠りが無い、第三に軽蔑、四に地獄。」「310 悪業を得ることと悪道に赴くこと、怯える男と怯える女に楽しみは少ない、また王は重い刑罰を課す、それゆえ人は他人の妻に近づくな。」と。

法話が終わったとき、ケーマ青年は預流果に確実に立った。それ以来、多くの人々は安心して過ごした。

過去物語

ところで、彼の前世の行いは何だったのか。彼はカッサパ仏の時代に最も強い力士であったが、二本の色美しい幢幡をカッサパ仏の金の仏塔に掲げて誓願を立てた。「知人や血の繋がった女たちを除いて、他の女たちは私を見て愛着するように」と。これが彼の前世の行いである。それゆえ、彼がどこに生まれ変わっても、他人の女たちは彼を見ると理性を保つことができなかったのである。

- 309. Cattāri thānāni naro pamatto, āpajjati paradārūpasevī; Apuññalābham na nikāmaseyyaṃ, nindaṃ taṭṭiyaṃ nirayaṃ catuttham.
- 309. [気づきを] 怠り、他者の妻に近しく慣れ親しむ人は、四つの状況を惹起する。[すなわち] 善ならざる利得(悪しき報い) あること、欲するままに臥せないこと、第三に、非難 [を受けること]、第四に、地獄 [に落ちること] である。
- 309. Cattāri thānāni naro pamatto, Āpajjati paradārūpasevī; Apuññalābham na nikāmaseyyaṃ, Nindaṃ taṭṭiyaṃ nirayaṃ catuttham.
- 310. Apuññalābho ca gaṭī ca pāpikā, bhīṭassa bhīṭāya raṭī ca thokikā; Rājā ca daṇḍam garukaṃ paneti, Tasmā naro paradāram na seve.
- 309. 放逸にして他の妻を 追い求むれば四事のあり 先づ禍、楽しく臥することなく、第三そしり、四に地獄。
- 310. 悪趣におちておびえつつ 逢う楽しみは僅にて 王は苛酷の罰を課す 親しむなかれ 他人ひとの妻

チャッターリ	ターナーニ	ナローパマットー	アーパッジャティ	パラダールーパセーヴィー
Cattāri	thānāni	naro pamatto,	āpajjati	paradārūpasevī;
四つの	状況を	人は、[気づきを]怠り、	惹起する。	他者の妻に近しく慣れ親しむ

Cattāri/catu:=catu(num. a. n. acc) 四 thānāni/thāna(n. pl. acc) [Sk. sthāna < sthā] 処, 場所, 住処, 在定, 状態, 点, 理由, 原因, 道理 nara/nara(m. sg. nom) 人, 人々 pamatto/pamatta(a. m. sg. nom) [pamajjati < mad の pp] 放逸なる, 放縱の, 我儘の, āpajjati/āpajjati(v. pr. 3sg) [ā-pad] 来る, 会う, 遭遇す, 到達す paradārūpasevī=para/para[//]: ①(adv. prep) 向うに, 越えて, 彼方に ②(a 代的, 依属) 他の, 彼方の, 上の-dārika 姦夫+dāra/dāra(m 依対)dāra(f) 若い女. 結婚した姉. 妻+upasevī/upasevin(a. m. sg. nom) [upaseva-in] 追求する, 随従する←upasevati(v) [upa-sev] 行う, 奉仕す, 敬う;

アプンニャラーバン	ナ	ニカーマセツヤン	ニンダン	タティーヤン	ニラヤン	チャトウツタン
Apuññalābham	na	nikāmaseyyaṃ,	nindaṃ	taṭṭiyaṃ	nirayaṃ	catuttham.
善ならざる利得あること、	欲するままに臥せないこと、	非難、	第三に、	地獄である。	第四に、	

Apuññalābham=apuñña/apuñña(a 依属) [a-puñña] 非福の+lābham/lābha(m. sg. acc) 得, 利, 利得, 利養 na/ nikāmaseyyaṃ=nikāma/nikāma(m) [// cf. nikanti] 欲望, 満足+seyyaṃ/seyyā(f. sg. acc) [Sk. śayyā < śī] 臥床, 寝床, 臥具, 臥法, 横臥, nindaṃ/ninda(f. sg. acc) [//] 毀咎(きし), 非難 taṭṭiyaṃ/tatiya(num. a. n. sg. acc) [Sk. ṭṭiya] 第三の nirayaṃ/niraya(m. sg. acc) 地獄, 泥犁 catuttham/catuttha(a. m. sg. acc) 第四の。

- 310. Apuññalābho ca gaṭī ca pāpikā, bhīṭassa bhīṭāya raṭī ca thokikā; Rājā ca daṇḍam garukaṃ paneti, tasmā naro paradāram na seve.
- 310. しかして、[男は] 善ならざる利得ある者となり、かつまた、[女は] 悪しき境遇ある者となる。恐怖する[男]に、恐怖する[女]に、しかして、歓楽は僅か。しかして、王は、重き棒(罰)を課す。それゆえに、人は、他者の妻とは慣れ親しまぬがよい。

アプンニャラーポー	チャ	ガティ	チャ	パーピカー	ビータッサ	ビーターヤ	ラティー	チャ	トーキカー
Apuññalābho	ca	gaṭī	ca	pāpikā,	bhīṭassa	bhīṭāya	raṭī	ca	thokikā;
[男は]善ならざる利得ある者となり、	[女は]境遇ある者となる。	悪しき	恐怖する[男]に、	恐怖する[女]に、	歓楽は僅か。				

Apuññalābho=apuñña/apuñña(a 依属) [a-puñña] 非福の+lābham/lābha(m. sg. nom) 得, 利, 利得, 利養/ ca/ gaṭī/gaṭī(f. pl. nom) [//] 趣, 行方, 死去 ca/ pāpikā/pāpaka(a) pāpikā(f. pl. nom) [pāpa-ka] 悪き, 邪悪の, bhīṭassa/bhīṭa(a. m. sg. gen) [bhāyati の pp] 恐れたる, 恐ろしき, 恐怖の←bhāyati(v) 怖畏す, おそれる bhīṭāya/bhīṭa(a. f. sg. gen) raṭī/raṭī(f. pl. nom) [// < ram] 楽, 喜楽 ca/ thokikā/thoka(a) 僅少の, 少し;

ラージャー	チャ	ダンダンガルカン	パネーティ	タスマー	ナロー	パラダールン	ナ	セーヴェー
Rājā	ca	daṇḍam garukaṃ	paneti,	tasmā	naro	paradāram	na	seve.
王は、しかして、	重き棒(罰)を	課す。	それゆえに、	人は、	他者の妻とは慣れ親しまぬがよい。			

Rājā/rājan: rājā(m. sg. nom) 王, 国王. ca/ daṇḍam/daṇḍa(m. sg. acc) 杖, 棒, むち, 琴のばち, 罰, 刑罰, 罰金 garukaṃ/garuka(a. m. sg. acc) [garu-ka] 重き, 重大なる paneti/paneti(v. pr. 3sg) [pa-nī] 適用する, 判決する daṇḍam~ 罰を与える, 処罰す, tasmā/tasmā(a) [ta の abl] それより, 彼より, それ故に←ta(人指示代 n. sg. abl) 彼, その, 彼女 nara/nara(m. sg. nom) 人, 人々 paradāram=para/para[//]: ①(adv. prep) 向うに, 越えて, 彼方に ②(a 代的, 依属) 他の, 彼方の, 上の-dārika 姦夫+dāram/dāra(m. sg. acc) dāra(f) 若い女. 結婚した姉. 妻 na/ seve/sevati(v. opt. 3sg) [// sev] 仕える, 従う, 依付す, 親しむ。

(22-5) Dubbacabhikkhuvatthu 生意気な比丘の物語 311-313

kuso yathāti imam dhammadesanaṃ satthā jetavane viharanto aññataraṃ dubbacabhikkhū ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある生意気な比丘について語られたものである。

ある比丘がうっかり一本の草を伐ってしまい、〔戒律違反になるかどうか〕疑念が起こったので、もう一人の比丘に近づいて、「ご同朋よ、草を伐った者に、何の〔戒律違反〕がありますか」と自分のしたことを話して、質問した。すると、もう一人の比丘は、「あなたは『草を伐ったために何かあるのか』と考えていますね。こんなことには何もありませんよ。ただ告白すれば許されます」と言って、自分も両手で草を引っぱって抜いた。比丘たちはこの出来事を師に告げた。

師はその比丘をさまざまに説いてお叱りになり、法を明らかにしつつ、次の詩句を唱えられた。「311 草も下手に掴めば、手を切るように、修行も下手に行えば、地獄へと引きずりこむ。」「312 たるんだ修行であれ、汚れた制戒であれ、疑わしい禁欲の行であれ、それは大きな果報をもたらさない。」「313 行うならばそれを行え、固い決意でそれをやり遂げよ、欺瞞に満ちた出家生活は、むしろ塵を撒き散らすだけ。」と。

法話が終わったとき、多くの人々が預流果などを獲得した。当の比丘も制戒を守り、阿羅漢果に到達した。

311. Kuso yathā duggahito, hatthamevānukantati; Sāmaññaṃ dupparāmattham, nirayāyupakaddhati.

311.あたかも、誤って掴んだ茅〔の葉〕が、まさしく、手を傷つけるように、誤って偏執された沙門の資質は、〔沙門その人を〕地獄へと引きずり落とす。

311.Kuso yathā duggahito, hatthamevānukantati; Sāmaññaṃ dupparāmattham, nirayāyupakaddhati.

312.Yaṃ kiñci sithilaṃ kammaṃ, samkiliṭṭhañca yaṃ vataṃ; Saṅkassaraṃ brahmacariyaṃ, na taṃ hoti mahapphalaṃ.

313.Kayirā ce kayirāthenaṃ, dalhamenaṃ parakkame; Sithilo hi paribbājo, bhiiyo ākirate rajam.

311.つい手にとりし吉祥草クサそうが 我れと我が手を截さる如く沙門サマナも暮らし誤れば地獄ニラヤにこそは引き込まる

312.為すこと緩漫 戒行穢れ 疑わしかる清浄行 これらは大なる果とならず

313.なすべきならば断固とし それに対して励むべし 行動鈍き遍歴者 兎角不浄を撒き散らす 訳：江原通子

311.握り方が悪ければ クサ草でさえ手を切るように 沙門の修行も間違えば 地獄に引きずり落とされる

312.およそ行為に締まりなく また務めにも汚れあり 疑いあれば、その梵行は 大きな果あるものにならず

313.なすべきならばそれをなせ 堅固にそれに邁進すべし 締まりを持たぬ出家の修行は いよいよ塵を撒き散らす

口語訳：片山一良（『ダンマパダ全詩解説 仏祖に学ぶひとすじの道』大蔵出版より）No.187（2010年9月）なぜ皆、覚らないの？ 仏道の軌道修正の仕方 Not to be a failure do not spoil your path

クソー ヤター ドウツガヒトー ハッタメーワーヌカントティ

Kuso yathā duggahito, hatthamevānukantati;

茅〔の葉〕が、 あたかも、 誤って掴んだ 手を まさしく、 傷つけるように、

Kuso/kusa(m.sg.nom)[Sk.kuśa]草,茅草,吉祥草 yathā/yathā(adv)[ya-thā]...の如くに,...の如し duggahito=du/du: ①=dur-(pref)

[Sk.duḥ,duḥ]悪き,難き② cf.dvi ニ,ニの+gahito/gahita(a)←ganhāti,;ganhati(v.pp)[Sk.grhñāti grah]取る,捕える,

hatthamevānukantati=hattham/hattha(m.sg.acc)[<hr Sk.hasta]手,手掌;肘[長さの単位,24 指節+eva/eva(adv)が,こそ,のみ,だけ

[yeva,ñeva,va,となることがある]+anukantati/anukantati(v)[anu-kantati ㊶切断す,破る←kantati: ①(v)[Sk.kṛṇatti kṛt ㊶紡ぐ,編む

㊶(ν)[Sk.kṛntati kṛt ㊶切る,切断す;

サーマンニヤン ドウツパラーマツタン ニラヤーユパカツダティ

Sāmaññaṃ dupparāmattham, nirayāyupakaddhati.

沙門の資質は、 誤って偏執された [沙門その人を] 地獄へと引きずり落とす。

Sāmaññaṃ/sāmañña: ①(a.n.sg.nom)[sāmaṇa-ya]沙門性,沙門位,沙門法②(n)[samāna-ya]平等,等一,統一-gata 統一せる

dupparāmattham/dupparāmatth(a)[du-parāmatth(a)]悪く取られたる←parāmatth(a)[parāmasati の pp]已執の,執取せる

←parāmasati(v)[parā-mrś]摩触す,執取す, nirayāyupakaddhati=nirayāya/niraya(m)地獄,泥犁+upakaddhati/upakaddhati(v.pr.3sg)

[upa-kaddhati]引く,引きつける cf.upakāṭṭha←kaddhati(v)[Sk.karṣati,kṛṣ]引く,牽く.吸う,描く,えがく.

312. Yaṃ kiñci sithilaṃ kammaṃ, samkiliṭṭhañca yaṃ vataṃ; Saṅkassaraṃ brahmacariyaṃ, na taṃ hoti mahapphalaṃ.

312.それが何であれ、緩慢な行為であるなら、さらには、それが、汚染された掟であり、疑いある梵行（禁欲清浄行）であるなら、それは、大いなる果と成らない。

ヤン キンチ スィティラン カンマン サンキリツタンチャ ヤン ワタン

Yaṃ kiñci sithilaṃ kammaṃ, samkiliṭṭhañca yaṃ vataṃ;

それが何であれ、 緩慢な 行為であるなら、 汚染された さらに、 それが、 掟であり、

Yaṃ/ya(関代 n.sg.nom)[Sk.yaḥ]〜である人,〜であるもの kiñci/kiñci(pron)[kin-cid]何ものか,何でも[その変化は kim に準ず]

sithilaṃ/sithila(a.n.sg.nom)[=sathila.Sk.sithira.sithila]徐緩の,ゆるやかな kammaṃ/kamma(n.sg.nom)[Sk.karman]業,行為,作業,家

業,羯磨,儀式, samkiliṭṭhañca=samkiliṭṭhañ/samkiliṭṭha(a.n.sg.nom)←samkilissati(v.pp)[sam + kilis + ya] becomes soiled or

impure+ca/ yaṃ/ vataṃ/vata: ①(adv)[Sk.bata,vata]実に②(m.n.sg.nom)[=bata.cf.Sk.vrata]禁戒,誓戒;[vatta と混用]儀法,善行,浄行;

サンカッサラン ブラフマチャリヤン ナ タン ホーティ マハツパラン

Saṅkassaraṃ brahmacariyaṃ, na taṃ hoti mahapphalaṃ.

疑いある 梵行（禁欲清浄行）であるなら、 それは、 成らない。 大いなる果と

Saṅkassaraṃ/saṅkassara(a.n.sg.nom)疑念を起させる,邪悪の brahmacariyaṃ/brahmacariya(n.sg.nom)[brhma-cariya]梵行,仏道修行;

清浄行,不婬,独身生活, na/ taṃ/ta(人指示代 n.sg.nom)彼,その,彼女 hoti/bhavati(v.pr.3sg)[bhū] 有る,存在する

mahapphalaṃ=maha/mahant(a 有持)大なる,偉大の+phalaṃ/phala: ①(n.sg.nom)[//]果,果实,結果②(m)切先,劍尖③(n)擧丸,こ

うがん④(m)[=pala]重さの量.

313. Kayirā ce kayirāthenam [kayirā nam (ka.)], dalhamenam parakkame; Sithilo hi paribbājo, bhiiyo ākirate rajam.
 313.もし、為すべきなら、これを為し、断固として、これに勤しむがよい。なぜなら、緩慢な遍歴遊行者は、より一層、塵を撒き散らすからである。

カイラー	チェー	カイラーテーナン	グラメーナン	パラッカメー
Kayirā	ce	kayirāthenam,	dalhamenam	parakkame;
為すべきなら、もし、		これを為し、	断固として、	これに勤しむがよい。

Kayirā/karoti(v.opt.3sg)[kr]なす,行う,作る ce/ kayirāthenam=kayirātha/karoti(v.opt.反照態 3sg)[kr]なす,行う,作る +enam/eta,etad(pron.a.n.sg.nom)これ, dalhamenam=dalham/dalha(a.n.sg.acc.adv)堅固の,確固たる dalham(adv)堅く +enam/eta,etad(pron.a.n.sg.acc)これ parakkame/parakkamati(v.opt.反照態 3sg)[para-kram]努力す,はげむ;

スイティロー	ヒ	パリッパージョー	ビッヨー	アーキラテー	ラジャン
Sithilo	hi	paribbājo,	bhiiyo	ākirate	rajam.
緩慢な	なぜなら、	遍歴遊行者は、	より一層、	撒き散らすからである。	塵を

Sithilo/sithila(a.m.sg.nom)[=sathila.Sk.śithira.śithila]徐緩の,ゆるやかな hi/hi(adv.conj)実に;何となれば paribbājo/paribbājaka;paribbāja(m.sg.nom)[Sk.parivrājaka](f)paribbājikā 遍歴者,普行者,遊行者,梵志, bhiiyo/bhiiyo(a.adv)[=bhīyo,bhīyo.cf.Sk.bhūyas.bhū(bahu)の比較級形]より多き,さらに多く ākirate/ākirati(v.pr.反照態 3sg)[ā-kirati]撒布す,散す ←kirati(v)[kir+a]scatters rajam/raja:rajas:rajo(n.sg.acc)[rajah]塵,塵垢,不淨.

(22-6) Issāpakatitthivatthu 嫉妬深い女の物語 314

akatanti imam dhammadesanam sathā jetavane viharanto aññataram issāpakatam itthim ārabba kathesi.
 この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ある嫉妬深い女について語られたものであ

彼女の夫が家の奴隷女の一人と密通した、ということである。彼女は嫉妬心からかれて、その奴隷女の両手両足を縛り、耳と鼻をそぎ落とし、廁に閉じ込めて扉を閉め、自分がその仕業をしたことを隠そうとして、「さあ、旦那さま、精舎に行って法を聴きましょう」と夫を連れて精舎に行き、法を聴きながらすわっていた。

ところが、彼女の親戚の人々が客人として訪ねてきて、扉を開いてその異変を見つけ、女奴隷の縛めを解いた。女奴隷は精舎へ行き、四衆(比丘、比丘尼、在家信者・在家信女)の真ん中でこの出来事をブツダに訴えた。

師は彼女の言葉をお聞きになって、「『私のこの悪行を他の人々は知らない』と思って、少しばかりの悪いことでも行うべきではありません。他人が知らなくても、善い行いだけをするべきです。悪い行いをして隠しても、あとで後悔の苦しみを起こします。しかし、善い行いは喜びだけを生みます」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。
 「314 悪事はしないほうがよい、悪事をあとで悔やむより。善い事は行うほうがよい、それをして後悔することはない。」と。

法話が終わったとき、その在家信者と妻は預流果に確実に立った。そして、夫婦はその奴隷女をその場で自の身にして、仏法の奉仕者にした。

314. Akatam dukkaṭam seyyo, pacchā tappati dukkaṭam; Katañca sukataṃ seyyo, yaṃ katvā nānutappati.

314.悪行は、[為すよりは] 為さずにいたほうが、より勝っている。[その] 悪行が、のちに悩み苦しめる [からである]。しかし、善行は、[為さずにいるよりは] 為したほうが、より勝っている。それを為して悩み苦しめない [からである]。

314 Akatam dukkaṭam seyyo, Pacchā tappati dukkaṭam; Katañca sukataṃ seyyo, Yaṃ katvā nānutappati.

314 悪行為なら しない方が勝れている あとで悩むことに 苦しむことになる 善行為なら おこなう方が勝れている あとで後悔することにはならない 和訳:スマナサーラ長老 No.188 (2010年10月) 人生の選択 意志を管理すると正しい選択ができる Management of freewill

アカタン	ドゥッカタン	セッヨー	パッチャー	タツパティ	ドゥッカタン
Akatam	dukkatam	seyyo,	pacchā	tappati	dukkatam;
為さずにいたほうが、	悪行は、	より勝っている。	のちに	悩み苦しめる[からである]。	[その]悪行が、

Akatam/akata[a.n.sg.nom]1. not done;not made2. not artificial. dukkaṭam/dukkata:,dukkata(n.sg.nom)[Sk.duṣkṛta]悪作,突吉羅 seyyo/seyya(a.n.sg.nom)よりよき,よりすぐれた, pacchā/pacchā(adv)[Sk.paścā,paścāt]後に,背後に,西方に tappati/tappati : ①(v.pr.3sg)[Sk.tapyate.tapati tap:pass]焼ける,苦しむ,悩む。 ②(v)[Sk.trpyate trp]満足する,喜ぶ dukkaṭam/dukkata:,dukkata(n.sg.nom)[Sk.duṣkṛta]悪作,突吉羅;

カタンチャ	スカタン	セッヨー	ヤン	カトワー	ナーヌタツパティ
Katañca	sukatam	seyyo,	yaṃ	katvā	nānutappati.
為したほうが、	しかし、	善行は、	より勝っている。	それを	為して

Katañca=Katañ+ca/ sukataṃ/sukata,sukata(a.n.sg.nom)[su-kata]善行,善行の seyyo/, yaṃ/ya(関代 n.sg.acc)[Sk.yaḥ]〜である人,〜であるもの katvā/karoti(v.ger)[kr]なす,行う,作る nānutappati=na+/anutappati/anutappati(v).pr.3sg[anu-tappati,Sk. anutapyate]悩まされる,苦しむ,悩む,後悔す。

(22-7) Sambahulabhikkhuvatthu 大勢の比丘たちの物語(3) — 雨安居中の生活に不満を言った比丘たち 315

nagaraṃ yathāti imaṃ dhammaḍḍesaṇaṃ satthā jetavane viharanto sambahule āgantuke bhikkhū ārabha kathesi.

この法話は、師がジェークヴァナ精舎に滞在しておられたときに、大勢の客来比丘たちについて語られたものであ

彼らはある辺境の地で雨安居に入り、最初の月は安楽に過ごした。中の月は盗賊たちがやってきて、比丘たちが托鉢に行く村を荒らし、捕虜を取って去った。それ以降、人々は盗賊を防ごうと、その辺境の都市の守りを固めるのに忙しく、比丘たちに恭しく奉仕するゆとりがなくなった。

比丘たちは困難な雨安居生活を過ごし、雨安居明けを迎えると、師に会うためにサーヴァッティー市に行き、師を礼拝し一隅にすわった。師は彼らを迎えて、「比丘たちよ、気持ちよく過ごしましたか」とお訊ねになった。「尊師よ、私たちは最初の月だけは安楽に過ごしました。中の月に盗賊たちが村を荒らしました。それ以来、人々は町の守りを固めるのに忙しく、丁寧に奉仕するゆとりが得られませんでした。ですから、私たちは不遇な暮らしを強いられました」と比丘たちが答えると、

師は、「やめなさい、比丘たちよ。そう考えてはなりません。気持ちのよい生活というものは、いつでも得難いものです。人々が町を守ったように、比丘たちは自分自身を守るべきです」とおっしゃって、次の詩句を唱えられた。

「315 辺境の都市が内も外も防護されるように、そのように自己を守れ。大事な時を逃してはならない、大事な時を逃した者たちは地獄に送られ嘆き悲しむ。」と。

法話が終わったとき、これらの比丘たちは焦燥心を起こし、阿羅漢果に確実に立った。

315. Nagaraṃ yathā paccantaṃ, guttaṃ santarabāhiraṃ; Evaṃ gopetha attānaṃ, khaṇo vo [khaṇo ve (sī. pī. ka.)] mā upaccagā; Khaṇātītā hi socanti, nirayamhi samappitā.

315.あたかも、辺境にある、内外共に保護された城市のように、このように、自己を保護するがよい。[この]瞬間が、あなたたちを超え行くことがあってはならない(瞬時でさえも、虚しく過ごしてはならない)。なぜなら、[この]瞬間を[無駄に]過ごした者たちは、地獄に引き渡され、憂い悲しむからである。

315. Nagaraṃ yathā paccantaṃ, guttaṃ santarabāhiraṃ; Evaṃ gopetha attānaṃ, khaṇo vo mā upaccagā; Khaṇātītā hi socanti, nirayamhi samappitā⁷ti.

315. 辺境の都市 内外うちそとを守り固むるが如く 瞬間を見過ごさず自己を守れ 瞬間空しく過ごしなば 地獄に墮ちて悲愁せん 訳：江原通子

辺境の都市が内外によく守護されているように 自己をよく守護するがよい 光陰空しく渡るなかれ 光陰空しく渡る者らは 地獄に墮ちて悩むゆえ訳：片山一良(『ダンマパダ全詩解説』春秋社より) No.189 (2010年11月) 夢想家ですか? 現実家ですか? 人生の無駄を省く方法 The perfect security system of life. “Khaṇo vo mā upaccagā”この瞬間を見過ごすなかれ。

ナガラ	ヤター	パッチャンタン	グッタン	サンタラバーヒラン
Nagaraṃ	yathā	paccantaṃ,	guttaṃ	santarabāhiraṃ;
城市の	ように、	辺境にある、	保護された	内外共に

Nagaraṃ/nagara(n.sg.nom)[//]城、市、都市 yathā/yathā(adv)[ya-thā]...の如くに,...の如し paccantaṃ/paccanta(a.n.sg.nom)[paṭi-anta,Sk.pratyanta]辺境の;辺地,国境, guttaṃ/gutta(a.n.sg.nom)[Sk.gupta <gup の pp]守られたる,守護されたる santarabāhiraṃ=santara/santara(a 有相)[sa-antara]内ある,内部の-bāhira 内外共なる+bāhiraṃ/bāhira(a.n.sg.acc)[<bahi]外の,外部の;

エーワン	ゴペータ	アッターナン	カノー	ヴォー	マー	ウパッチャガー
Evaṃ	gopetha	attānaṃ,	khaṇo	vo	mā	upaccagā;

このように、自己を保護するがよい。 [この]瞬間が、あなたたちを超え行くことがあってはならない。

Evaṃ/evaṃ(adv)かく、かくの如く gopetha/gopeti(v.imper.2pl)[Sk.gopayati,gup の caus]守る,護る. attānaṃ/attan(m.sg.acc)

[Sk.ātman]我,自己,我体, khaṇo/khaṇa(m.sg.nom)[Sk.kṣaṇa] : ①刹那,瞬時,時節②不難(cf.akkhaṇa)acc. khaṇam (adv)瞬時に③[<khan]掘ること vo/vo : ①adv. [=ve, have] 実に. ②[Sk.vah] tvam(pl.acc) : ve(adv)実に mā/mā(adv)なかれ [禁止,強い決意,否定的願望,未来への危惧,疑問,否定等を示す upaccagā/upātigacchati(v.aor.3sg)[upa-ati-gacchati]超える,征服す;

カナーティーター	ヒ	ソーチャンティ	ニラヤンヒ	サマピッター
Khaṇātītā	hi	socanti,	nirayamhi	samappitā.

[この]瞬間を[無駄に]過ごした者たちは、なぜなら、憂い悲しむからである。

Khaṇātītā=Khaṇa/khaṇa(m.有持)+atītā/afīta(a.n→m.pl.nom)[// ateti <ati-i の pp]過ぎ去れる,過去の,過去 hi/hi(adv.conj)実に;何となれば socanti/socati(v.pr.3pl)[Sk.śocati śuc]愁う,うれう,悲しむ, nirayamhi/niraya(m.sg.loc)地獄,泥犁

samappitā/samappita(a.m.pl.nom)[samappeti の pp]引き渡された,与えられた;具備せる,有せる,所有する←samappeti(v)[sam- appeti <ṛ の caus]渡す,置く,与える,任せる pp.samappita.

(22-8) Nigaṇṭhavatthu ジャイナ教徒たちの物語 316-317

alajjitāyeti imam dhammadesanam satthā jetavane viharanto nigaṇṭhe ārabba kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、ジャイナ教徒たちについて語られたものである。

ある日、比丘たちがジャイナ教徒たちを見て話を始めた。「ご同朋よ、まったく体を隠さず布切れさえまわすに在る者たちより、ただ前だけでも隠しているあのジャイナ教徒たちのほうが勝れているのではないのでしょうか。彼らは恥を知っているようですから。」それを聞いてジャイナ教徒たちは、「我々はそんな理由で隠しているわけではありません。塵や埃などの個別の要素も、生命と感覚器官を具えているのです。だから、そういうものが我々の托鉢の器に入らないようにという理由で、我々は覆っているのです」と言って、比丘たちと問答になり、大いに議論した。

比丘たちは師のもとへ行きすわったときに、その出来事を話した。師は、「比丘たちよ、恥じる必要のないことに恥じて、恥じるべきことに恥じない者たちこそ、悪道に赴くことになるのです」とおっしゃって、法を説き明かしつつ、次の詩句を唱えられた。「316 恥じるべきでないことに恥じ、恥じるべきことに恥じない、間違った見方を奉ずる人々は悪道に赴く。」
「317 恐怖のないところに恐怖を見せ、恐怖のあるところに恐怖を見せない、間違った見方を準ずる人々は悪道に赴く。」と

ジャイナ教徒たちは法話が終わったとき、焦燥を心に感じて出家した。居合わせた人々にとっても法話は意義深いものであった。

316. Alajjitāye lajjanti, lajjitāye na lajjare; Micchādittḥisamādānā, sattā gacchanti duggatim.

316. [彼らは] 恥ずべきではないところで恥じ、恥ずべきところで恥じない— 誤った見解(邪見)を受持しながら、[迷いの] 有情たちは、悪しき境遇(悪趣)に赴く。

316. Alajjitāye lajjanti, Lajjitāye na lajjare; Micchādittḥisamādānā, Sattā gacchanti duggatim.

317. Abhaye bhayadassino, Bhaye cābhayadassino; Micchādittḥisamādānā, Sattā gacchanti duggatim.

316. 恥づべきところ恥づるなく 恥づべからざるを恥となす かかる邪見の人々は 死して悪趣に墮ちて行く

317. 怖れなきをば猶怖れ 怖るべきをば怖れざる かかる邪見の人々は 死して悪趣に墮ちて行く 訳: 江原通子

(Dhammapada 316-317) No.190 (2010年12月) 恥と怖れ 世界の平和を保つ二つの心理 Two guardians of the world

アラッジターイェー

ラッジャンティ

ラッジターイェー

ナ

ラッジアレー

Alajjitāye

lajjanti,

lajjitāye

na

lajjare;

[彼らは] 恥ずべきではないところで 恥じ、

恥ずべきところで

恥じない

Alajjitāye=A/+lajjitāye/lajjitāya(a.n.sg.loc)←lajjita(a.grd)←lajjati(v.pp)[lajj] 恥じる lajjanti/lajjati(v.pr.3pl)[lajj] 恥じる, lajjitāye/ na/lajjare/lajjati(v.pr.反照態 3pl)[lajj] 恥じる;

ミッチャーディッティサマーダーナー

サッター

ガツチャンティ

ドゥツガティン

Micchādittḥisamādānā,

sattā

gacchanti

duggatim.

誤った見解(邪見)を受持しながら、

[迷いの] 有情たちは、

赴く。

悪しき境遇(悪趣)に

Micchādittḥisamādānā=Micchā/micchā(adv)[Sk.mithyā] 邪に, 邪悪に-dittḥi 邪見+dittḥi/dittḥi(f有属)[Sk.drṣṭi cf.dittḥa,dassana] 見, 見解, 意見, 特に 謬見+samādānā/samādāna(n→m.pl.nom)[sam-ādāna] 受持, 受戒, sattā/satta : ①(a)[sajjati sañj:pp] 懸着せる, 執着の, 固着の②(m.pl.nom)[sat] 有情, 衆生, 霊③(a)[sapati śap:pp] 咀(のろ)われた, 呪咀せる④(num)七 gacchanti/gacchati(v.pr.3pl)[// <gam] 行く duggatim/duggati(f.sg.acc)[Sk.durgati] 悪趣。

317. Abhaye bhayadassino, bhaye cābhayadassino; Micchādittḥisamādānā, sattā gacchanti duggatim.

317. 恐怖なきところで恐怖を見る者たち、さらには、恐怖あるところで恐怖を見ない者たち— 誤った見解を受持しながら、[迷いの] 有情たちは、悪しき境遇に赴く。

アバイエー

バヤダッスイノー

バイエー

チャーバヤダッスイノー

Abhaye

bhayadassino,

bhaye

cābhayadassino;

恐怖なきところで

恐怖を見る者たち、

恐怖あるところで

さらには、恐怖を見ない者たち

Abhaye/abhaya(a.n.sg.loc)[a-bhaya] 無畏, 無怖 bhayadassino=bhaya/bhaya(n,m 依対)[bhī] 怖, 怖畏, 恐怖+dassino/dassin(a.m.pl.nom)[Sk.darsin] 見ある, 認める, bhaye/bhaya(n,m.sg.loc) cābhayadassino=ca/+abhaya/abhaya(a.n.m 依対)+dassino/dassin(a.m.pl.nom);

ミッチャーディッティサマーダーナー

サッター

ガツチャンティ

ドゥツガティン

Micchādittḥisamādānā,

sattā

gacchanti

duggatim.

誤った見解を受持しながら、

[迷いの] 有情たちは、

赴く。

悪しき境遇に

Micchādittḥisamādānā/, sattā/ gacchanti/ duggatim/.

(22-9) Tittihyasāvakaṅkavattu 外道の弟子たちの物語 318-319

avajjeti imaṃ dhammadesanaṃ saṭṭhā jetavane viharanto tittihyasāvake ārabha kathesi.

この法話は、師がジェータヴァナ精舎に滞在しておられたときに、外道の弟子たちについて語られたものである。あるとき、他の外道の信者たちが、自分の息子たちが正しい見方をする在家信者たちの息子たちと仲間ともども遊んでいるのを見て、息子たちが家に帰ってきたときに、「おまえたちはサーキヤ族の息子(ブツダ)の修行者たちを拝んではならない。また、彼らの精舎に入ってはならない」と誓わせた。

少年たちはまたある日、ジェータヴァナ精舎の外の楼門の近くで遊んでいて、喉が渇いた。すると、ある〔仏教の〕在家信者の家の少年に、「君、あそこで水を飲んで、ぼくたちにも持ってきておくれ」と、精舎の中へ行かせた。その精舎に入り師を礼拝してそのことを話した。すると、師は少年に、「君は水を飲んでから行って、ほかの少年たちにも水を飲みここへ来るように言いなさい」とおっしゃった。他の少年たちもやってきて、水を飲んだ。師は彼らと呼ばせ、彼らにふさわしい法話を語られ、彼らに不動の信心を起こさせ、三帰五戒を受けさせた。彼らはそれぞれ自分の家に帰ってから、そのことを両親に話した。

すると、親たちは「私たちの息子たちが間違った信心を持ってしまった」と、憂い嘆いた。すると、近隣に住む賢い人々がやってきて、彼らの嘆きを静めるために法を語った。隣人たちの話を聞いて、〔外道の親たちも〕「この子供たちを修行者ゴータマさまにお任せせよう」と、大勢の親族の群れと一緒に精舎に連れて行った。師は彼らの気持ちをお見通しになり、法を説き明かすつ、次の詩句を唱えられた。「318 避ける必要のないことを避けて、避けるべきことを避ける必要がないと見る、間違った見方をいなく人々は悪い境涯に赴く。」「319 避けるべきことを避けるべきものと知り、避ける必要のないことを避ける必要がないと知り、正しい見方をそなえた人々は善い境涯に赴く。」と。

法話が終わったとき、全員が三つの拠り所(仏・法・僧)に確実に立ち、法を聴いて次々と預流果に到達した。

318. Avajje vajjamatino, vajje cāvajjadassino; Micchādittṭhisamādānā, saṭṭhā gacchanti duggatim.

318. 罪過なきものについて「罪過あり」と思い、さらには、罪過あるものについて「罪過なし」と見る者たち――誤った見解を受持しながら、〔迷いの〕有情たちは、悪しき境遇に赴く。

318 Avajje vajjamatino, Vajje cāvajjadassino; Micchādittṭhisamādānā, Saṭṭhā gacchanti duggatim.

319 Vajjaṅca vajjato ñatvā, Avajjaṅca avajjato; Sammādittṭhisamādānā, Saṭṭhā gacchanti suggatim.

318 罪なきものをありとなし 罪あるものをなしとなす かかる邪見の人々は死して悪趣に墮ちてゆく

319 罪あるものをありとなし 罪なきものをなしとなす 正しい見解の人々は死して善趣に到らん 訳：江原通子

(Dhammapada 318-319)No.192 (2011年2月)ブツダと仲良しになった子供たち 道德の勘違い Moral values need clear cut definition

アワツジェー	ワツジャマティノー	ワツジェー	チャーワツジャダツスイノー
Avajje	vajjamatino,	vajje	cāvajjadassino;
罪過なきものについて「罪過あり」と思い、		罪過あるものについて	さらには、「罪過なし」と見る者たち
Avajje/avajja(a.n) : ① [Sk.avadya] 罪の、非難さるべき、罪、過失②(n.sg.loc)[a-vajja : ① 罪、罪過] 罪の無い、罪過ない			
vajjamatino=vajja/vajja : ① (n 依属)[vajjati:grd.cf.Sk.varjya] 罪、罪過②(a.n)[vadati または vajjati : ②:grd.cf.Sk.vādyā] 言われるべき、			
所言、語、奏でらるべき、楽器③ vadati:opt+matino/matain(a.m.pl.nom)[mata+in] 思念ある←mata : ①(a)[= muta,maññati の pp] 所思、			
所覚、謬想の②(a)[marati mr の pp] 死せる、死者←mati(f)[cf.mata ①<man] 思念、覚、慧、意見、vajje/vajja : ①(n.sg.loc)			
[vajjati:grd.cf.Sk.varjya] 罪、罪過 cāvajjadassino=ca/avajja/avajja(a.n) : ① [Sk.avadya] 罪の、非難さるべき、罪、過失②(n 依対)[a-vajja : ① 罪、罪過] 罪の無い、罪過ない+dassino/dassin(a.m.pl.nom)[Sk.darṣin] 見ある、認める;			

ミツチャーディッティサマーダーナー	サッター	ガツチャンティ	ドウツガティン
Micchādittṭhisamādānā,	saṭṭhā	gacchanti	duggatim.
誤った見解を受持しながら、	〔迷いの〕有情たちは、	赴く。	悪しき境遇に
Micchādittṭhisamādānā/, saṭṭhā/ gacchanti/ duggatim/duggati(f.sg.acc)[Sk.durgati] 趣趣。			

319. Vajjaṅca vajjato ñatvā, avajjaṅca avajjato; Sammādittṭhisamādānā, saṭṭhā gacchanti suggatim.

319. しかしながら、罪過あるものを「罪過あり」と知って、さらには、罪過なきものを「罪過なし」と〔見る者たち〕――正しい見解(正見)を受持しながら、〔迷いなき〕有情たちは、善き境遇(善趣)に赴く。

ワツジャンチャ	ワツジャト	ニャトウワー	アワツジャンチャ	アワツジャト
Vajjaṅca	vajjato	ñatvā,	avajjaṅca	avajjato;
罪過あるものを	しかしながら、「罪過あり」と	知って、	罪過なきものを	さらには、「罪過なし」と〔見る者たち〕
Vajjaṅca=vajjaṅ/vajja : ①(n.sg.acc)[vajjati:grd.cf.Sk.varjya] 罪、罪過②(a.n)[vadati または vajjati : ②:grd.cf.Sk.vādyā] 言われるべき、				
所言、語、奏でらるべき、楽器③ vadati:opt+ca/ca(conj) ~と、また、しかし、~も、そして vajjato/vajja : ①(n.sg.abl)				
[vajjati:grd.cf.Sk.varjya] 罪、罪過②(a.n)[vadati または vajjati : ②:grd.cf.Sk.vādyā] 言われるべき、所言、語、奏でらるべき、楽器				
③ vadati:opt ñatvā/jānāti(v.ger) [ク jānā] 知る、avajjaṅcaavajjaṅ/vajja : ① [Sk.avadya] 罪の、非難さるべき、罪、過失②(n.sg.acc)[a-vajja : ① 罪、罪過] 罪の無い、罪過ない+ca/ avajjato/avajja : ① [Sk.avadya] 罪の、非難さるべき、罪、過失②(n.sg.abl)[a-vajja : ① 罪、罪過] 罪の無い、罪過ない;				

サンマーディッティサマーダーナー	サッター	ガツチャンティ	スツガティン
Sammādittṭhisamādānā,	saṭṭhā	gacchanti	suggatim.
正しい見解(正見)を受持しながら、	〔迷いなき〕有情たちは、	赴く。	善き境遇(善趣)に
Sammādittṭhisamādānā/, saṭṭhā/ gacchanti/ suggatim/sugati(f.sg.acc)[su-gati] 善趣、善道[天と人]			

Nirayavaggo dvāvisatimo niṭṭhito. 地獄の章が第二十二となり、〔以上で〕終了した。

Nirayavaggo dvāvisatimo niṭṭhito.